

メルト

建築設計を手段として、あらゆる事象や概念にひとたび溶解を試み、  
”一つの可能態の姿として顕在化する”ことを目的として創作活動を行っている。

林 健太郎

建築家。  
奈良県生駒在住 1994 年生まれ。  
関西学院大学学士過程、京都工芸繊維大学大学院修士課程終了。  
在学中に fala atelier (ポルトガル)にて勤務。  
卒業後に海法圭建築設計事務所(東京)、LIGHTHOUSE 設計(壱岐島/長崎)での勤務を経て、地元奈良にUターン。



古今東西の器やカトラリーをコレクトしている施主のための、キッチンスペースの増設。海を渡ってきた華麗な洋食器。日本各地の窯元の色がしみ出た陶器や磁器たち。それらが同じ場に共存している内装のあり方が求められた。



器と建築との違いについて、とても考えた。器の製造過程で必ず用いられる、マジスティックな火。下地と仕上げが縋い交ぜになったテクスチャ。対して、建築で頻繁に用いられる塗装仕上げの膜厚は0.1mm(100 $\mu$ )が標準とされる。0.1mmで取り繕われた薄っぺらい世界を仕上げと見なす、ある種の偽り。

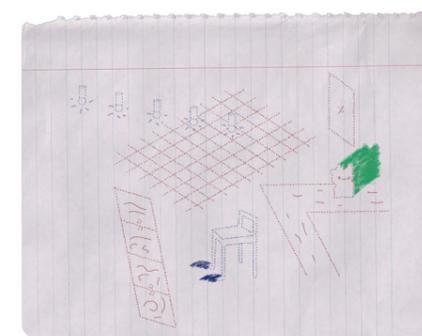
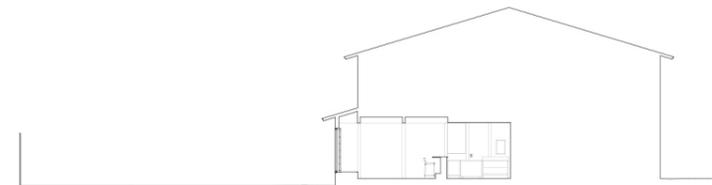
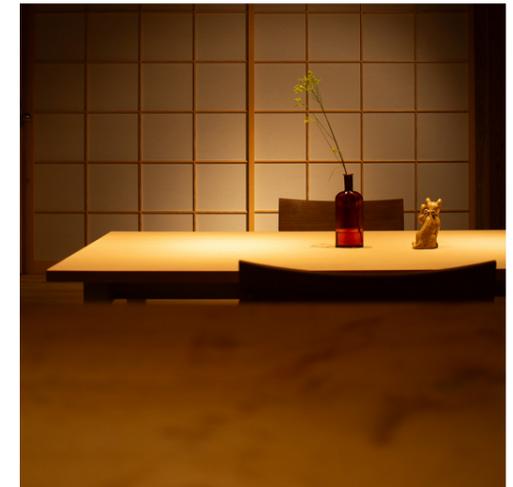
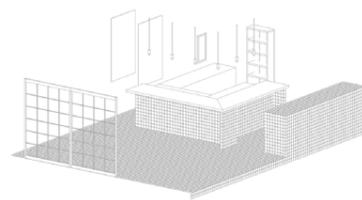
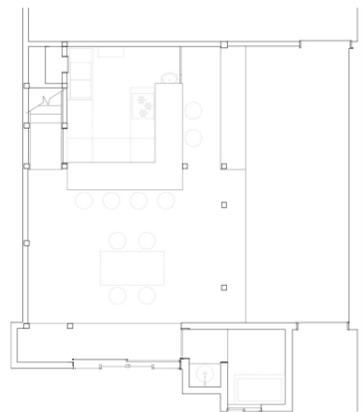
厚みのある素材感が作り出す複雑さと不確かさをおおらかに内包した器の潔さに、敬意を通り越して嫉妬めいた感情さえ覚えた。

そのような心の揺れ動きを経て、素地を手がかりとした細部が、アンコントロールな全体像によって構成される内装を試みた。個性の強い器たちに対して、“計算され尽くした精緻な混沌”を作り出すことでしか、それらを受け止めることはできないと感じた。

荒材の小口をハンマーで叩いて角を取って挽板とした無垢のヒバ材カウンター。無計画に塗装された既存の柱梁のケレンがけ。アルミ素地や、漆の刷毛引きで表情をつけた灯具。などなど。

それら細部の背景となる床や立ち上がりには約7000枚のタイルを1枚ずつ貼ってもらった。目地を5ミリと設定しながらも、過剰な枚数によって誤差が生じた(生じさせた)。それは、冗長性を備えた72ミリ角のグリッドが作り出す、覚束ないゆらぎとも言えるかもしれない。

親しみと可笑しみが、うろつく場。ねーねーほほほ。

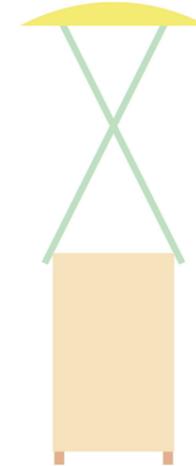
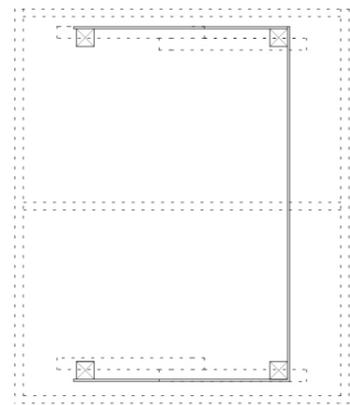
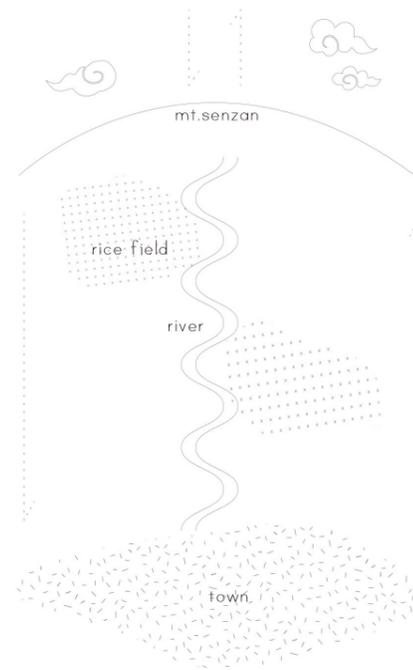


神話や伝説といった類のものに興味がある。なんちゃらの神が岩に隠れたせいで世界が暗くなったとか、天狗が飛び立つときにできた60cmぐらいの足跡が石に残っている、とかとか。くだらないほど、現実離れしているほど惹かれる。

国生み神話が宿の山(先山/淡路島)のふもとで作られたお米を販売するための、期間限定かつ室内限定の什器の設計と製作。シナベニヤ特有の”取り繕られた”テクスチャをもつ「地」から、厚さ2.5mmベニヤで作られた薄っぺらい「山」は持ち上げられている。「地」と「山」、その間をつなぐ「橋」の三者は異なる幾何学を有し、アンバランスながらも辛うじて一つの存在を成立させている。

白いロープを纏った長髪の老人が杖を片手に後光とともに現れた瞬間、天狗がとんでもなく長い棒を簡単にブンブン振り回している瞬間。今いるこの”どうしようもない”「地上」から一時的に離脱し、自分自身が「ここだけどこか」に存在していた感覚と同時に、「地上」に戻ってきてしまっている感覚が同居している。

食べることや何かに耽ること、祈ることが刹那的な断片(やその連続)の行いであるように、その瞬間だけあられ立ち消えるフラジャイルな関係性を体現することを目指した。



tohge stand

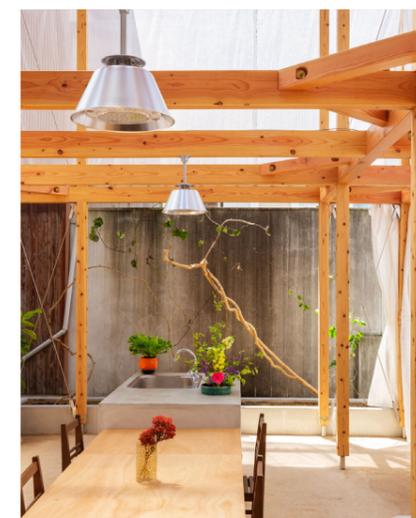
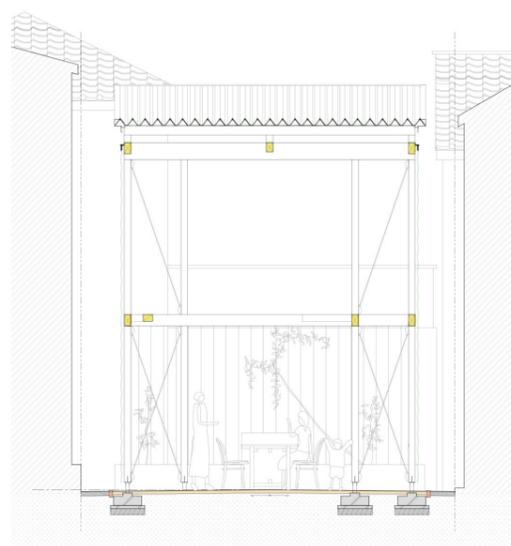
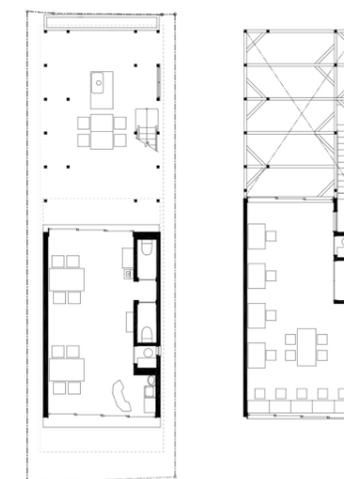
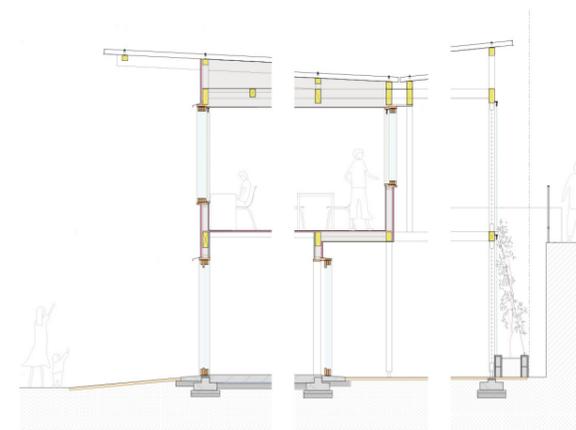
2024  
stand(furniture)

0.4m<sup>2</sup>  
Awajisima, Hyogo

敷地は長崎県の離島吉岐島の東側に位置する芦辺浦という港まちの通りに面した小さな空き地である。以前は商店が連なり、日常的な賑わいがあったが、近年は人も商店も減り続け、空き地がまちを侵食している。そんな中、6年前に開業した一軒のゲストハウスがきっかけとなり、徐々にまちに変化が生まれ始めた。島の外から移住してくる人が少しずつ現れ、地元の人と混ざり合いながら新しいコミュニティが生まれている。

このような状況の中で計画されたACB Livingはコワーキング利用・企業のオフサイト研修も行う施設である。島外の人と地域のコミュニティとの結節点となる場が求められた。参照したのは、過去このまちにあった何げない時間と空間。夏の夕暮れには気持ちの良い海風を求めて多くの人々が家から出てきてたわいもない話をしていた。そこにはごく自然にコミュニケーションが成立していた。

この計画では限られた予算でより大きな空間を獲得するために敷地奥側にフリースペースを確保している。このスペースは内外壁を省略することでコストをおさえ、床面積は敷地一杯まで拡張される。この空間があることで、三方を囲まれた敷地でありながら室内への光と風をコントロールし、自然エネルギーの最適な活用を可能としている。外壁のないこの空間は開閉できる経済的な農業用シートにより、取り込む光と風を調節できる。ふわりと揺れるシートが吹き抜ける風を可視化し、空間の境界を曖昧にする。バタフライ形状の屋根、敷地の奥まで見通せるプランは、心地よい風の抜けを実現する最適解を模索した結果である。このまちの隙間に設けられた空間は、都市とは違うノイズ（まちの人の日常や鳥たちの声）、心地よく吹き抜ける風と共にゆるやかにまちとつながっていく。この小さな計画は個と公共、外部と内部、様々なものが混ざり合い、建築単体ではなく、周囲の状況に少しずつ依存しながら成立している。  
[LIGHTHOUSE HP より引用]



acb living

\* 前職設計事務所 (LIGHTHOUSE 設計) での担当

2021  
co-working space

108.5m<sup>2</sup>  
Iki, Nagasaki

さまざまな選んだことと選ばなかったこと  
のなりゆきで、今の自分そして世界がある  
のだと時々気づかされる。親戚の影響で始  
めたクラブ活動。名前のカッコよさで選ん  
だ高校。いつもは気にならない朝の星占い  
をなぜか見てしまって乗り遅れた一本遅い  
電車。

必然 / 偶然に関係なく” 選ばなかったが  
あり得た世界” が、今この世界と並走して無  
数に存在しているのじゃないかと思うと、  
ちょっとばかり怖くなる。

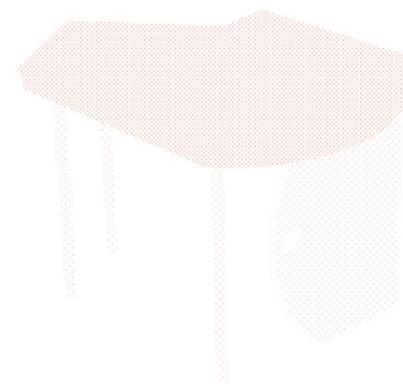
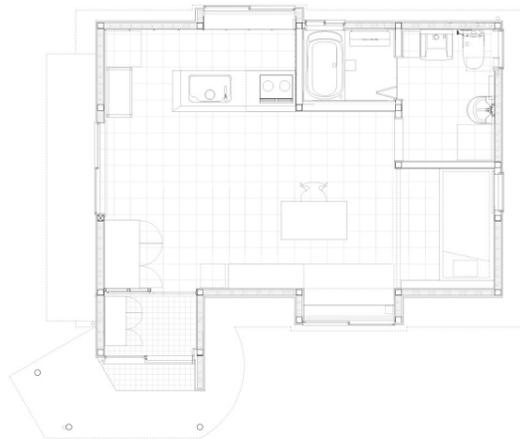
初老の一人暮らしの改修。クライアントの  
人柄が染み出るような、明るく楽しく快適  
で安全な住まいの在り方が求められた。室  
内の仕上げはラワン合板を主として色彩と  
遊び心に溢れた内装とし、外装は色鮮やか  
な赤を選んだ。新たに設けた増築部分は屋  
根の見付けを太くしたり曲線を用いるなど、  
にぎやかな演出を散りばめた。

引き渡し後に様子を見に伺うと、収納扉の  
戸当たりとして「ドコモダケのキーホル  
ダー」がクライアントの手によって設置さ  
れていた。扉を開けると壁と扉の間に無抵  
抗に挟まれるといった悲しい結末が繰返  
されるそのしつらえが、不思議とインテリア  
と心地よく馴染んでいた。おそらくこの  
改修が行われなかったら、このキーホルダー  
はタンスの奥に眠ったままだっただろう。

またある日、クライアントから一枚の写真  
が届いた。なんの意味も用途もなく、なん  
となく良さそうといった理由(にもならない  
理由)で開けた玄関先の円形開口部に、  
野良猫がすっぽりと座ってた。

建築という行為によって”あり得た”世界  
と”あり得なかった”世界の秩序が入り乱れ、  
そこにクライアントの人間性が働きかけた  
結果、幸せに、そして愉快地に再統合されて  
いく姿を目にした。

改めて建築の楽しさを感じると同時に、選  
んだ(設計した)世界よりも、しなかった  
世界に無限に広がる(広がっていた)伸び  
やかな可能態の豊かさとして、それでも設計  
しなければならぬこの職業の責任の大き  
さを感じた、とても印象的なプロジェクト  
であった。



house m

\* 前職設計事務所 (LIGHTHOUSE 設計) での担当

2022  
house(renovation)

39.0m<sup>2</sup>  
Iki, Nagasaki

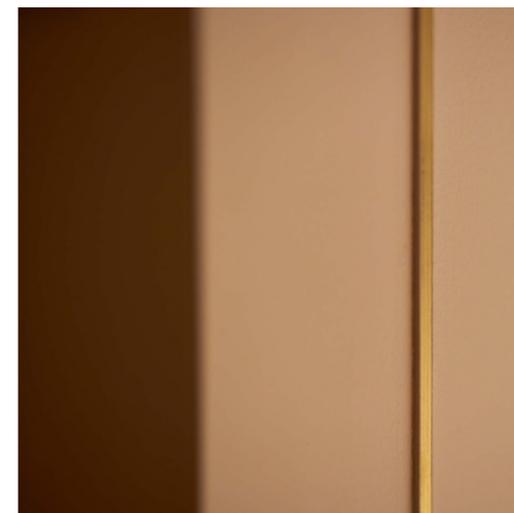
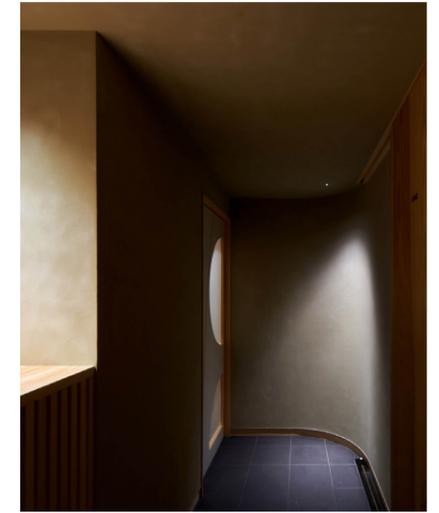
「鮨たか尾」は長崎市の思案橋、飲食店が連なる繁華街の一角にある。

雑然とした街の中、整然としたファサードで空気感の違いをつくりだした。

客席は外の喧騒から距離感をとるために入口には小さな帳場のある空間を設けている。この空間では曲面の左官壁が空間に優しさを与えている。

客席はカウンターのみ7席。桧の無垢材によるカウンターは職人によって磨き上げられ、鮨を握る店主の背景になる弁柄色の左官壁と共に凛とした空気をつくりだしている。

[LIGHTHOUSE HP より引用]



sushi takao

\* 前職設計事務所 (LIGHTHOUSE 設計) での担当

2023  
sushi restaurant(renovation)

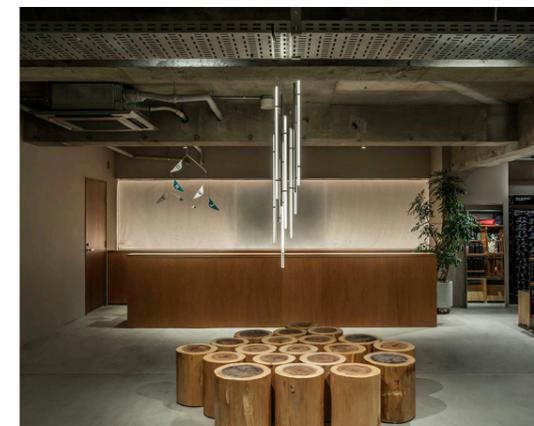
42.9m<sup>2</sup>  
Nagasaki, Nagasaki

新宿から電車で1時間、京王線の終着点である高尾山口駅の目の前にある宿泊施設の改修計画。夜明けと共に電車の発車音と鳥のさえずりが聞こえる場所にある。町が終わり森が始まる場所に建つホテルの在り方を考えた。目指したのは、単なる宿泊施設ではなく地域の新たな拠点となること。日帰り登山客が中心の高尾山で、山や川、町での過ごし方を再発見するための活動拠点であり、地域のプレイヤーが高尾の魅力を共有する交流拠点であり、都市生活者が高尾での生活をプレ体験する体験拠点でもある。

客室数や規模の調整、合宿など大人数での利用に対応するホールをつくるため、壁を解体する必要が生じ、館全体で耐震設計をしている。客室は片付けられる什器によって2人客にはぜひたくなりビングを、9人チームには多様な活動を許容する広間を提供する。客室入り口にルーバー戸を設け、高尾の谷筋を流れる風が客室内を通るように、また合宿時に部屋の中から友人らの声が聞こえる廊下とした。

解体時に出たRCガラや山で拾い集めた落ち葉、近隣の山の枝払い材や丸太などを内外装に活用した。裏山の土が中庭に落ちて堆積し、アスファルトの床から雑草が芽吹くように伸びる。そうした雑草の美しさと高尾の自然のたくましさを尊重し、既存のアスファルト床をカットして土壌を増やし、植栽の伸びしろを生み出した。高尾に自生する種を中心に、登山客の靴に付く種の混交を意識しつつも、靴洗い場を併設した。運営スタッフや地域住民、登山客、薪、種子、落ち葉、RCガラ、卓越風など、「タカオネ」を取り巻くあらゆる登場人物を主客関係のない事象として捉え、またそれらが紡ぐネットワークを一つの生態系として、その系をより良く持続させる活動の素地となる施設像を考えた。いわば「タカオネ」を中心とした生態計画である。

[海法圭建築設計事務所 HP より抜粋]



takaone

\* 前職設計事務所 (海法圭建築設計事務所) での担当

2021  
hotel(renovation)

2126.7m<sup>2</sup>  
Hachio-ji, Tokyo

人が雪を冷たいと感じたとき、雪は人のことを暖かいと感じているのでしょうか。人と自然は奪い合うのか。それとも与え合うのか。

私たちの惑星にとって水はかけがえのない資源の一つです。そして雪は、水が地球上を循環する際の状態の一つです。この循環の中で人と雪はどのような理想的関係を紡ぐことができるのでしょうか。本プロジェクトは、両者のさまざまな関係を生態学的に調査することで、新しい関係を作るきっかけを探します。

古くから氷や雪は、冬の間に蓄えられ、夏に利用されてきました。世界中でさまざまな形で行われてきたこの技術は、1950年代に近代的な冷蔵技術に取って代わられました。しかし近年、エネルギーコストの上昇や持続可能性への関心の高まりを受けて、この伝統的な技術が再び注目されています。雪の貯蔵庫が普及し、雪からエネルギーを生成する新しい技術が開発されています。私たちは、日本の山で食料を保存するために使われていた伝統的な雪貯蔵庫「雪室」の現代版を設置しました。本来の設定では、雪の利用は繊細なシステムにつながっています。気候変動、土地の消費、金融危機、都市化、汚染、限られた天然資源の持続不可能な使用など、大きな影響を受けている安塚の小さな村は、経済の一部を「雪室」に頼っています。集められた雪は、公共施設の空調、農業、食料生産、繊維産業など、さまざまな活動に利用されています。

本プロジェクトでは、イタリアの山から持ってきた雪を利用して大きな雪の山を作ること、パヴィリオンを雪室にコンバージョンし、雪の新しい利用法の開発や雪に適用する新しい技術の研究を行います。雪山はスノーエンジニアの伊藤親臣とのコラボレーションであり、温湿度計を用いた観測と分析はミラノ大学環境科学政策学部とのコラボレーションです。

このプロジェクトを通して安塚を始めとした豪雪地帯において、外皮の断熱が不十分な既存建物を、将来的に雪室として活用する可能性を探ります。

[海法圭建築設計事務所 HP より抜粋]



melting landscape

\* 前職設計事務所 (海法圭建築設計事務所) での担当

2021  
exhibition

12.0m<sup>2</sup>  
venice, Italy

©2024 メルト